

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02520

研究課題名(和文)世界シェイクスピア上演への認知的アプローチの意義と可能性

研究課題名(英文)Cognitive Approaches to World Shakespeare Performance Studies: Challenges and Possibilities

研究代表者

浜名 恵美 (HAMANA, EMI)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：20149355

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：従来の世界シェイクスピア上演研究は、主に、役者と観客の感覚(特に視覚、聴覚)や知覚・役者はどのように演じるのか(見せるのか、話すのか、動作をするのか)、観客はどのように感じたり反応したりするのかを解明しようとしてきた。本研究では、上演が観客の認知(知識表現、記憶、知識獲得、概念形成などの人間の知的な働き)に与えるインパクトの一端を解明した。さらに、特に連続するフィードバック・ループ(繰り返し)によって上演されるSleep No Moreのような没入型演劇の場合、上演が認知を拡張する可能性があり、この点からも認知的アプローチをさらに推進するべきであると提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界シェイクスピア上演研究と21世紀に新たに重視されている分野である認知的アプローチを接合し、シェイクスピア作品の上演の新たな意義を積極的に見出すだけでなく、その世界各地における多様な上演を今日の世界が必要としている認知的実践の促進に資するような理論的・実践的な方法をも探求した。

研究成果の概要(英文)：Conventional studies of world Shakespearean performances have primarily sought to elucidate the senses (especially visual and auditory) and perceptions of players and audiences--how players perform (show, speak, or move) and how audiences feel and react. This study elucidated, albeit in part, the impact of the performances on audience cognition (human intellectual faculty such as knowledge representation, memory, knowledge acquisition, and concept formation). It also suggested that staging may extend cognition, especially in the case of immersive plays such as Sleep No More, which are staged through continuous feedback loops, and in this regard should further promote cognitive approaches.

研究分野：英語圏文学

キーワード：世界シェイクスピア上演研究 認知的アプローチ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

認知言語学があるように言語学分野では認知学的アプローチは20世紀後半から発展してきたが、Modern Language Association (MLA)がMLA Commons platformを使って開催する最初のオンライン会議が“Cognitive Approaches to Comparative Literature”(2017年4月)であることが示しているように、人文学分野における取り組みはまだ初期段階であると同時に非常に期待されているアプローチである。特に演劇・パフォーマンスの分野における認知学的アプローチは未発達であるので、先駆的な研究を目指した。

(1) 国内・国外の研究動向及び位置づけ

認知学的アプローチの意義と動向 先行研究として、Lisa Zunshine, ed., *The Oxford Handbook of Cognitive Literary Studies* (Oxford: Oxford UP, 2015), 15. Noel Carroll, “Theater and the Emotion”がある。また、Bruce R. Smith, ed., *The Cambridge Guide to the Worlds of Shakespeare* (Cambridge: Cambridge UP, 2016), Vol.2, Part XXV. Lars Engle, Shakespeare and the Criticsの最後で(p.1802)認知学的アプローチへの期待が表明されている。心理学、人工知能、言語学、脳神経科学、哲学、社会学などの学際的分野として誕生した認知科学は、さまざまな課題に活発に取り組んでいるが、核心にあるのはヒトとは何か、情動とは何かという難問である。演劇・パフォーマンスは、ヒトと感情に深く関与する分野であり、俳優や観客の関係から舞台装置の効果にいたるまで、認知学的アプローチによる、従来とは異なる舞台芸術分野におけるヒトと情動の理解が期待される。

世界シェイクスピア上演の意義と動向 世界シェイクスピア会議が、1971年の第1回から、世界各地の上演に注目し、今日では“World Shakespeares”という研究領域が定着し、特に欧米とアジアの研究者が研究を推進している。また東アジアの研究チームが、欧米中心主義の是正を目指して、2010年からASIIA (Asian Shakespeare Intercultural Archive) で英語・中国語・日本語・韓国語の字幕付でアジアの上演の録画の保存・公開を行っている。シェイクスピア上演の「本場」とされるイギリスでも今日では、世界各地の劇団、演出家、俳優等を招聘している。国際英語正教授学会におけるシェイクスピア部門は最も参加者が多く、世界各地の著名な学者が研究発表を行うことで知られている。

本研究はそれぞれ現代社会にとって重要な3つの領域(認知学的アプローチ、世界シェイクスピア上演研究、演劇・パフォーマンス研究)を接合し、その相乗効果により、より大きな成果をあげることを目指す革新的な学際研究である。

(2) 着想にいたった経緯(従来の研究成果をふまえて)

本研究着想の主要因は3つある。1)平成26年度学振で招聘した演劇理論家B・レノルズが提唱する、現代思想のみならず脳科学・認知心理学等を取り入れた“transversal poetics”に強い知的刺激を受けたこと。2)平成28年8月に世界シェイクスピア会議において超言語上演と認知学的アプローチの必要を論じた私の論文が高く評価され、国際学術誌(*Litteraria Pragensia: Studies in Literature and Culture*, Prague: Charles University, <http://litteraria-pragensia.ff.cuni.cz/>.)に掲載を懇請されたこと。3)日本の人文学(演劇分野を含む)は危機に瀕しても抜本的改革案を出せないように見えるが、認知学的アプローチを導入することにより、新たな価値を見出せる可能性があることと認識したこと。これに関連して特筆したいことは、大阪大学のロボット工学の石黒浩研究室においてコンピュータで数年解析してもアンドロイドを人間のように動かすことができなかったときに、劇作家・演出家で認知心理学等の研究も進めている平田オリザが機械にはできない「演技」の細かい指示を出すことによってアンドロイドが一気により人間らしく見えるようになったという実例が示すように、シェイクスピアを代表とする演劇への認知学的アプローチには、産学連携の可能性もあると認識したことである。

(3) これまでの研究成果を発展させた内容

本研究は研究代表者がこれまでに採択された4つの科学研究を発展させたものである。最初の研究では「異文化コンフリクト」、2番目では、異文化コンフリクトを乗り越える「異文化理解」、3番目では、「演劇をととした異文化理解教育」、4番目では特に日本では未発達の「超言語上演」を重点的に研究した。本研究では、世界シェイクスピア上演を対象として、「認知学的アプローチ」を先進的に探究する。

2. 研究の目的

世界シェイクスピア上演への認知学的アプローチの意義と可能性を解明する。世界的にもまだ新しく、特に日本の演劇研究では遅れている認知学的アプローチ(cognitive approaches)の立場から、世界各地で行われているシェイクスピア上演について、その意義と可能性を理論と実践の両面から解明する。本研究の具体的目的は、3年間で、世界シェイクスピア上演の認知学的アプローチによる新しい価値を見出すとともに、今後の世界シェイクスピア上演への認知学的アプ

ローチの理論と実践に有意義な提言を行うことであった。

3. 研究の方法

主要な方法は、世界シェイクスピア上演への認知学的アプローチに資する国内外のシェイクスピア上演の実地調査、国内外の関連学会への参加と研究者との意見交換、インターネットを含めた情報収集、映像資料分析、文献調査、3年目に計画した国際英語正教授学会(IAUPE Triennial Conference、開催地：国立アダム・ミツケヴィチ大学[ポーランド共和国])における研究発表とその論文の出版であった。

4. 研究成果

(1) 平成29年度の研究成果

「世界シェイクスピア上演への認知学的アプローチ」を重点的に検討するために、文献調査と国内外の上演の実地調査を集中的に行い、最新の動向を把握することに努めた。特筆すべきことは、日本シェイクスピア協会から平成29年度学会2日目の特別パネル・ディスカッションのコーディネーターを依頼され、認知学的アプローチとも関わりの深いDigital Humanitiesを取り上げることにしたが、この分野から学術的に得るものが多かったことである。主要な研究成果は以下のとおりである。1. アメリカの「文学への認知学的アプローチ(Cognitive Approaches to Literature)」グループへの入会が認められた。2. 平成29年8月7日~22日：カナダと連合王国に出張。8月8日~12日：DH2017Conference(開催校：マギル大学)参加。8月12日~22日：ロンドンで上演調査及び論文執筆。3. 平成29年10月8日：第56回日本シェイクスピア学会(開催校：近畿大学)特別パネル・ディスカッション「シェイクスピア研究におけるデジタル・ヒューマニティーズの成果と可能性」のコーディネーターを務めた。4. 平成30年1月3日~9日：アメリカ合衆国へ出張。1月4日~7日：MLA2018Convention(開催場所：New York Hilton Midtown, Sheraton New York)に参加。1月6日8:30-11:30：DHのワークショップに参加。1月3日夜と1月7日夜にシェイクスピアの没入型パフォーマンスとして有名な*Sleep No More*の上演調査を実施した。5. 平成30年3月30日~4月1日：上海(中国)に出張(自費)。3月30日夜と3月31日夜にシェイクスピアの没入型パフォーマンスとして有名な*Sleep No More*の上海版の上演調査を実施した。

(2) 平成30年度の研究成果

国内外の研究者との関係を強化し、世界シェイクスピア上演への認知的アプローチ研究を充実させることに努めた。さらに、本研究に関連して、デジタル・ヒューマニティーズと没入型演劇を追究した。主要な研究実績は以下のとおりである。1. 2018年7月18日~24日：連合王国に出張。7月20日~21日にバーミンガム大学シェイクスピア研究所とロイヤル・シェイクスピア・カンパニー共催の学会Radical Mischief(開催地：ストラットフォード・アボン・エイヴオン)の二つの部門(Democracy, Form)に参加した。2. 2019年7月22日~26日にポーランドで開催される国際英語正教授学会(International Association of University Professors of English)のシェイクスピア部門のパネル"Innovative Approaches to Shakespeare in Theatre and Studies"で、"Cognitive Approaches to Shakespeare Plays in Immersive Theatre with Special Focus on Punchdrunk's *Sleep No More* in New York (2011-) and Shanghai (2016-)"を発表することになった(学会プログラム電子版公開済)。3. 2019年3月2日~11日：連合王国に出張。英国図書館(British Library)で文献調査、論文執筆、没入型演劇調査を行った。

(3) 令和元年度の研究成果

7月22~26日に開催された国際英語正教授学会IAUPE(International Association of University Professors of English)の国際学会(3年毎に開催、2019年度開催校：Adam Mickiewicz University in Poznan)のシェイクスピア部門で口頭発表を行なった。8月30~31日に開催されたJADH(Japanese Association of Digital Humanities)の年次大会(2019年度開催校：関西大学千里山キャンパス)に参加し、日本におけるDigital Humanitiesの最新動向を調査した。9月8~16日にフォルジャー・シェイクスピア研究所(所在地：アメリカ合衆国ワシントン, D.C.)に出張し、デジタル部門の2名の研究者と面談した。

IAUPE2019で行なった研究発表は本科の課題「シェイクスピアへの認知学的アプローチ」の2019年時点での総括と言えるものである。研究発表では、4E Cognition(Embodied, Embedded, Extended, Enacted)に焦点をあわせて、没入型演劇形式による『マクベス』の翻案のニューヨーク版と上海版の現代の観客に与える認知的インパクト、芸術的・文化的価値を解明した。発表をもとにした研究論文(使用言語：英語)は既に査読を経て、2020年度にポーランドの学術誌*Multicultural Shakespeare* (vol.21(36), 2020, pp.23-36)に掲載される予定である。

3つの科研(2011-2013年度、2014-2016年度、2017-2019年度)の成果をまとめた英語の本を出版した。認知的アプローチから認知と深く関わるデジタル・ヒューマニティーズへと関心が広がり、デジタル・ヒューマニティーズに関する学会活動(学会参加、学会パネリスト)を積極的に行った。

(4) 3年間の成果の総括

本研究の主要な成果としては、以下の4点をあげることができる。

従来の世界シェイクスピア上演研究は、主に、役者と観客の感覚(特に視覚、聴覚)や知覚 役者はどのように演じるのか(見せるのか、話すのか、動作をするのか)、観客はどのように感じたり反応したりするのか を解明しようとしてきた。本研究では、上演が観客の認知(知識表現、記憶、知識獲得、概念形成などの人間の知的な働き)に与えるインパクトの一端を解明した。さらに、特にデジタル技術を駆使しながら、連続するフィードバック・ループによって上演される *Sleep No More* のような没入型演劇の場合、4E Cognition (Embodied, Embedded, Extended, Enacted)(4E 認知(体現、埋め込み、拡張、実演))に着目すると、上演が認知を拡張する可能性があり、この点からも認知的アプローチをさらに推進するべきであると提案することができた。

英語論文1本、日本語論文5本、英語口頭発表3本、英語と日本語の口頭発表1本、日本語口頭発表1本、英語図書(分担執筆)1本、英語図書(単著)1本。合計13本。

海外調査・学会出張(連合王国3回、アメリカ合衆国2回、中華人民共和国1回、カナダ1回、ポーランド1回)、国内学会出張(大阪府2回)、合計10回

(注)個人研究費、自費等による出張を含む。

英語のホームページ(CMS)の維持・更新

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Emi Hamana	4. 巻 56
2. 論文標題 Safaring the Night: A Midsummer Night's Dream Updated	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Shakespeare Studies	6. 最初と最後の頁 18-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浜名恵美	4. 巻 XI
2. 論文標題 デジタル・ヒューマニティーズの本格的導入の提案：日本の英語文学研究のresilienceのために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英文学研究（日本英文学会 支部統合号）	6. 最初と最後の頁 1-10（95-104）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浜名恵美	4. 巻 65
2. 論文標題 アジア・シェイクスピア上演・研究の現在：シェイクスピアのアジア、アジアのシェイクスピア	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英米文学評論（65巻から電子ジャーナル）	6. 最初と最後の頁 30 - 49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 浜名恵美	4. 巻 78
2. 論文標題 「第133回MLA年次大会（MLA 2018 Convention）DHセッション参加記」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人文情報学月報 DHM078【後編】	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 浜名恵美	4. 巻 64
2. 論文標題 英語文学研究の最新動向 - デジタル・ヒューマニティーズ - について2017年度東京女子大学主催 高等学校教科別セミナー：英語 報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英米文学評論	6. 最初と最後の頁 57 - 80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 浜名恵美	4. 巻 66
2. 論文標題 演劇とテクノロジー：平田オリザのアンドロイド演劇	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英米文学評論	6. 最初と最後の頁 38 - 72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計5件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Emi Hamana
2. 発表標題 Curated Conversations 20 July: Democracy, 21 July: Form
3. 学会等名 Radical Mischief: A Conference Inviting Experiment in Theatre, Thought and Politics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 浜名恵美 (コーディネイター兼パネリスト)
2. 発表標題 パネル・ディスカッション「シェイクスピア研究におけるデジタル・ヒューマニティーズの成果と可能性」(使用言語：日本語と英語)
3. 学会等名 第56回日本シェイクスピア学会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Emi Hamana (Participant)
2. 発表標題 454. Digital Humanities Tools and Technologies for Students, Emerging Scholars, Faculty Members, Librarians, and Administrators. Presiding: Raymond G. Siemens, U of Victoria
3. 学会等名 MLA 2018 Convention (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Emi Hamana
2. 発表標題 A Cognitive Approach to Shakespearean Plays in Immersive Theatre, with a Special Focus on Punchdrunk's Sleep No More in New York (2011-) and Shanghai (2016-)
3. 学会等名 IAUPE 2019 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 浜名 恵美
2. 発表標題 初期近代英文学と女性に関するDigital Humanitiesの最新動向と今後の展望
3. 学会等名 第58回日本シェイクスピア学会 パネル・ディスカッション：近代初期英文学と女性 (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Emi Hamana (Krystyna Kujawinska and Grzegorz Zinkiewicz, eds.)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Lodz University Press	5. 総ページ数 204 (浜名の章、133 - 144)
3. 書名 Shakespeare: His Infinite Variety	

1. 著者名 Emi Hamana	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Shumpu Publishing	5. 総ページ数 183
3. 書名 Shakespeare Performances in Japan: Intercultural-Multicultural-Translingual	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Professor Emi Hamana's Homepage https://emihamana.net
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----